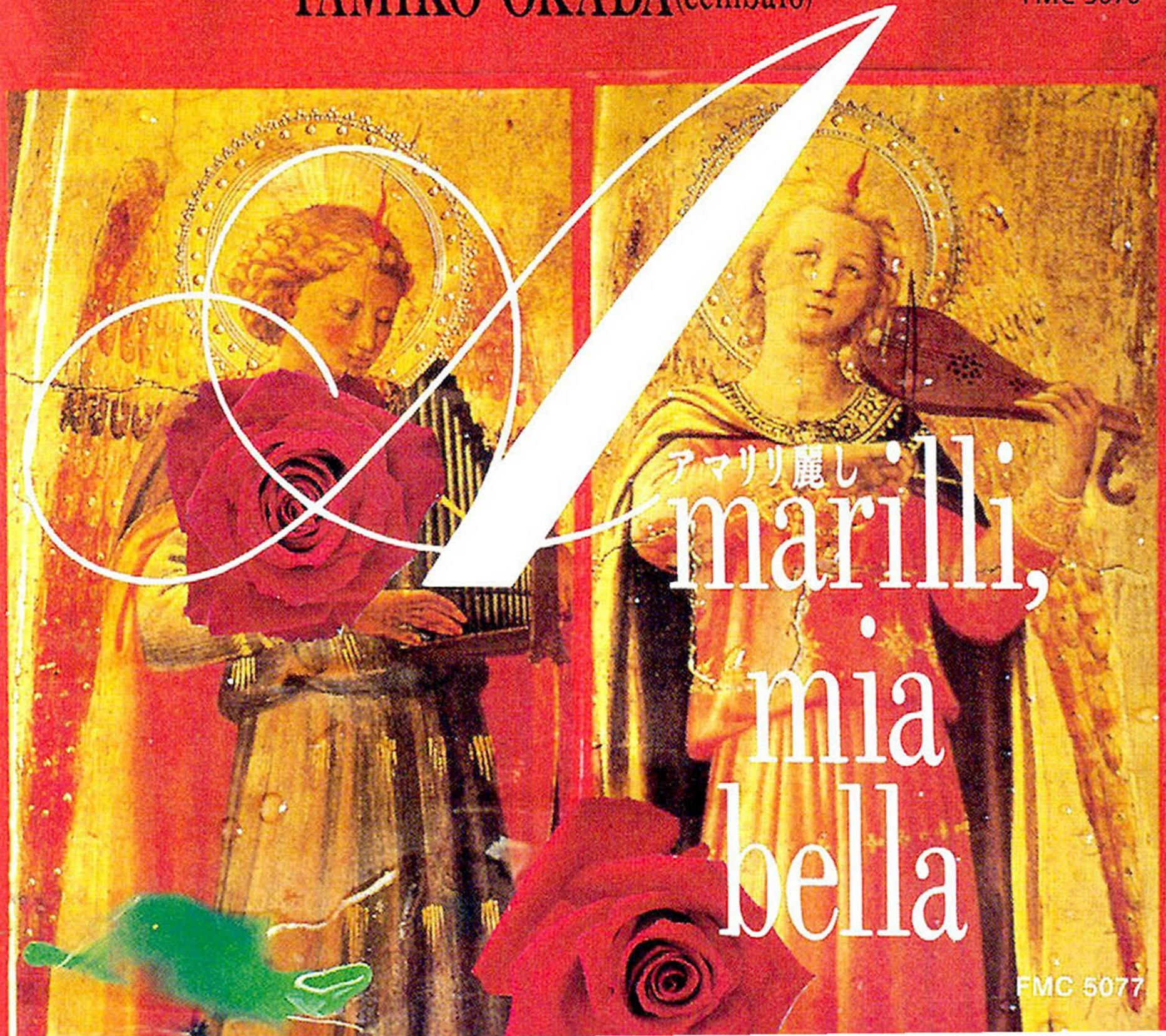
TAKASHI OKADA(counter tenor)
TAMIKO OKADA(cembalo)

FAUEM
FMC-5070



アマリリ麗し
marilli, mia bella

FMC 5077

アマリリ麗し
Amarilli, mia bella

TAKASHI OKADA (counter tenor)
TAMIKO OKADA (cembalo)

〈曲目〉	〈作曲〉	〈使用楽器〉
1. Sento nel core (3:30) 〈わが胸を〉	Alessandro Scarlatti	1
2. Amarilli, mia bella (2:57) 〈アマリリ麗し〉	Giulio Caccini	1 (リュート)
3. Star vicino (2:13) 〈君がみそばに〉	Salvatore Rosa	2
4. Tu ch'hai le penne (3:14) 〈翼持つ君〉	Giulio Caccini	2 (リュート)
5. Lascia ch'io pianga (3:47) 〈泣かせたまえや〉	George Frideric Handel	1 (ダブル8)
6. If music be the food of love (2:35) 〈もし音楽が愛の糧ならば〉	Henry Purcell	1
7. O lead me (2:34) 〈私を導いてください〉	Henry Purcell	2
8. Music for a while (3:20) 〈音楽はしばしの間〉	Henry Purcell	2
9. Since from my dear (3:11) 〈アストレアとの別れ〉	Henry Purcell	1
10. Thrice happy lovers (2:26) 〈幸せの恋人たち〉	Henry Purcell	1
11. The fatal hour (2:57) 〈最後の刻〉	Henry Purcell	1

岡田　孝　カウンターテノール　　岡田多美子　チェンバロ

使用楽器 1. フレンチタイプ/ダブルマニュアル　1979
2. フレミッシュタイプ/シングルマニュアル　柴田雄康　1982

岡田孝さんのCDによせて

皆川達夫

岡田孝さんといえば、知る人ぞ知るのすぐれた声楽家である。カウンター・テナーという高音域を歌う特殊な技をもった歌手として、このジャンルでの日本の第一人者と評されている。国内で幅広い活躍をつづけておられるばかりではなく、ドイツにまで演奏旅行されて、本場の国の人びとから「日本に岡田あり」と熱烈な喝采を受けられた。わたくしも何回か岡田さんの演奏に接して、その度ごとにふかい感動と感銘を受けてきているのである。とくに何年か前の全日本合唱コンクールのおりに、岡田さんはバーンスタイン作曲のミサ曲の独唱を受けもたれてあの難曲を見事に歌いあげ、岡山シンフォニー・ホールに集まった多数の聴衆にふかい感動をあたえられた。わたくしはその時の岡田さんの名唱を、今でもまるで昨日のことのように鮮明に記憶している。

その岡田さんが今回、CDを発表されることになった。岡田さんの活動を知る人なら、もう何枚も何枚ものレコードが出されている筈と思いこむところだが、実は少年時代にボーイ・ソプラノとして録音されたものを除くと、一九七八年に発表されて話題を呼んで以来、今回のCDが二回目だという。音楽にたいして謙虚である岡田さんは、慎重すぎるほど慎重に自分の技をさぐり、やっと十六年にして二回目のCDを世に問う心境に達されたということなのだろう。

確かに今回のCDにおさめられた古典イタリア歌曲やパーセルを聞くと、岡田さんが満を持してこのCDを歌いあげておられることが実感されてくる。今まで聞きなれた筈の音楽作品がまったく新しい姿で、岡田さん自身の音楽として流れだしているのである。夫人の岡田多美子さんのチェンバロ伴奏も好ましく、息のあった演奏を作りあげている。

今日わが国の音楽家たちは古楽の世界でも瞠目すべき活動をみせているが、とくにカウンター・テナーというきわめて特殊なジャンルだけに、わたくしは今回の岡田さんのお仕事を稀有のものと高く評価し、これがひろく国際的に知られてほしいと願わざるをえないのである。

プログラムの前半を飾るのは、いわゆる〈イタリア古典歌曲集〉の傑作である。1570年代、フィレンツェの貴族の館に学者、詩人、音楽家たちが集い、人文主義の理念にもとづいて古代ギリシャの音楽劇の復興を試みていた。彼ら'カメラータ'がめざしたのは、言葉と音楽との完全な一致である。当時はルネサンス・ポリフォニー全盛の時代。声楽・器楽ともに、模倣対位法を主体とする多声音楽が主流であった。しかし複数の声部が複雑に絡み合う書法では、言葉を明瞭に伝えにくいし、言葉の情緒をダイナミックに表出することにも制約がある。そこで彼らはポリフォニーを放棄し、'歌いながら話しているrecitar cantando'ような独唱、いわゆるモノディ様式を案出する。独唱を支えるのはただ一本の低音だが、低音には和音を示す数字が付されており、伴奏者はその数字にしたがって、歌詞を考慮しながら即興的に和音をつけてゆく。ちょうどフォーク・ソング集などで、旋律の下にベースとコード・ネームだけが書かれていて、あとはそのコードをアルペジオで弾こうと、ストロークで弾こうとご随意に、というのと同じ趣向である。これぞ本格的な通奏低音(数字つき低音)の始まりであった。

そして1602年、カメラータの一員だったG.カッチーニ(1546-1618)は、モノディ様式による画期的な曲集〈新しい音楽Le Nuove musiche〉を出版する。そこに収められていた歌曲が、〈アマリリ麗し〉であり、〈翼持つ君〉なのである。〈アマリリ麗し〉が〈イタリア古典歌曲集〉の冒頭を飾っているのは決して故なきことではない。

ギリシャ音楽劇の復興をめざしたカメラータがモノディ様式によって実現した舞台芸術が、すなわちオペラであった。オペラはC.モンテヴェルディ(1567-1643)のもとで飛躍的な展開を遂げる。17世紀の中頃には、モノディが、筋を進めるレチタティーヴォ(朗唱)と、旋律や美声を強調するアリアとに分化、いわゆるベル・カント唱法の時代を迎える。そして世紀の末にオペラの中心地となったナポリで活躍し、古典的なオペラ・セリア(正歌劇)を確立したのが、〈わが胸を〉の作者A.スカルラッティ(1660-1725)であった。ナポリ楽派の影響は大きく、イタリア人以外の作曲家もナポリ楽派の様式でイタリア・オペラを書くにいたる。〈泣かせたまえや〉は、ドイツ生まれながら、ナポリ楽派のベル・カントを自家薬籠中のものとしたG.F.ヘンデル(1685-1759)が、1711年に見事なイギリス・デビューを飾ったイタリア・オペラ〈リナルドRinaldo〉のなかのアリアである。

さて今から100年ほど前、イタリアの音楽学者A.パリゾッティ(1853-1913)が〈イタリア古典歌曲集〉の原型である〈独唱のための古いアリア集 Arie antiche ad una voce〉(Ricordi,1885-c1898)を編んだ時、彼は19世紀のロマン的な美学にしたがってピアノ伴奏譜を書き、表情記号を施した。それが私たちの慣れ親しんだ〈イタリア古典歌曲集〉である。しかしこのディスクでは、曲が書かれた当初の(例えばカメラータの)意図を生かすアプローチがなされており、聴い慣れ、聴き慣れていたはずのイタリア古典歌曲がどのような姿を現すかがひとつの聴き所となっている。

プログラムの後半には、夭折の天才ヘンリ・パーセル(1659-1695)の歌曲の珠玉が集められている。パーセルは、ウェストミンスター・アベイのオルガニストやチャペル・ロイヤルのオルガニストなど、当時のイギリス音楽界で最高の地位を兼任し、教会音楽、宮中祝典音楽、劇音楽、室内楽と多方面で活躍したが、1695年に36才の若さで没した。没後、1698年と1702年に出版された彼の歌曲の傑作選は、古代ギリシャの伝説的音楽家にちなんで〈イギリスのオルフェウスOrpheus Britannicus〉と題されている。せつないまでに美しい歌を残したパーセルに、これほどふさわしい名はないであろう。

ここで歌われる歌曲は、いずれもその〈イギリスのオルフェウス〉に収められた名作ぞろいである。〈もし音楽が愛の糧ならば〉と〈最後の刻〉は単独で残る独唱曲。前者はシェイクスピア(1564-1616)の《十二夜 Twelfth Night》の冒頭にもとづく。この2曲以外は、すべてパーセルが芝居用に書いた歌曲である。〈私を導いてください〉はローマ時代のブリタニアを舞台とする悲劇《ボンデュカ Bonduca》でヒロインが歌うアリア。〈アストレアとの別れ〉はやはりローマ時代を扱った《ディオクレティアヌスの物語 The History of Dioclesian》の挿入歌。そして〈幸せの恋人たち〉はシェイクスピアの《夏の夜の夢 A Midsummer Night's Dream》にもとづく《妖精の女王 The Fairy Queen》の終幕の婚礼の場でジュピターの妻ジュノーが歌うアリアである。ギリシャ悲劇に題材をとった《オイディプス Oedipus》の挿入歌〈音楽はしばしの間〉は、延々と反復される低音の上に作られている。悲劇的な運命の中でのつかの間の安らぎを、これほど恍惚的に描いた音楽がほかにあるだろうか。

那須輝彦

1. Sento nel core
〈わが胸を〉

Sento nel core certo dolore,
che la mia pace turbando va.

Splende una face che l'alma accende,
se non è amore, amor sarà.

2. Amarilli, mia bella
〈アマリリ麗し〉

Amarilli, mia bella,
non credi, o del mio cor dolce desio,
d'esser tu l'amor mio?
Credilo pur: e se timor t'assale,
Prendi questo mio strale
Aprimi il petto e vedrai scritto il core:
Amarilli è 'l mio amore.

3. Star vicino
〈君がみそばに〉

Star vicino al bell'idol che s'ama,
è il più vago diletto d'amor!

Star lontan da colei che si brama,
è d'amor il più mesto dolor!

4. Tu ch'hai le penne

(Ottavio Rinuccini[?])

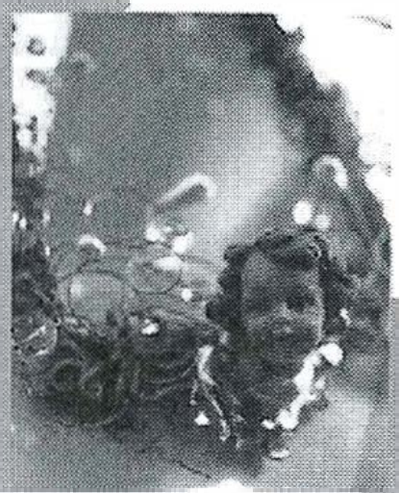
〈翼持つ君〉

Tu ch'hai le penne Amore
E sai spiegarle a volo,
Deh muovi ratto un volo
Fin là dov'è'l mio core.
E se non sai la via,
Co'miei sospir t'invia.

Va pur ch'il troverrai
Tra'l velo e'l bianco seno,
O tra'l dolce sereno
De' luminosi rai,
O tra bei nodi d'oro
Del mio dolce tesoro.

Vanne lusinga, e prega
Perchè dal bel soggiorno
Faccia il mio cor ritorno,
E se'l venir pur niega,
Rivolto ai nostro sole,
Digli cotai parole:

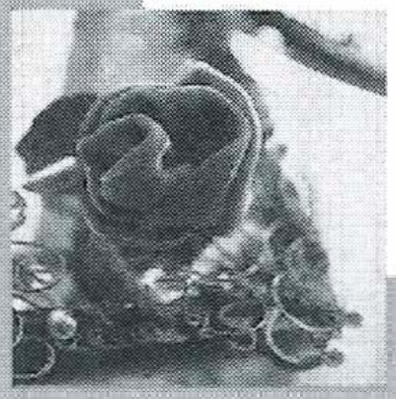
Quel tuo fedele amante,
Tra lieta amica gente,
Vive mesto e dolente,
E col tristo sembiante
D'ogni allegrezza spento
Turba l'altrui contento.

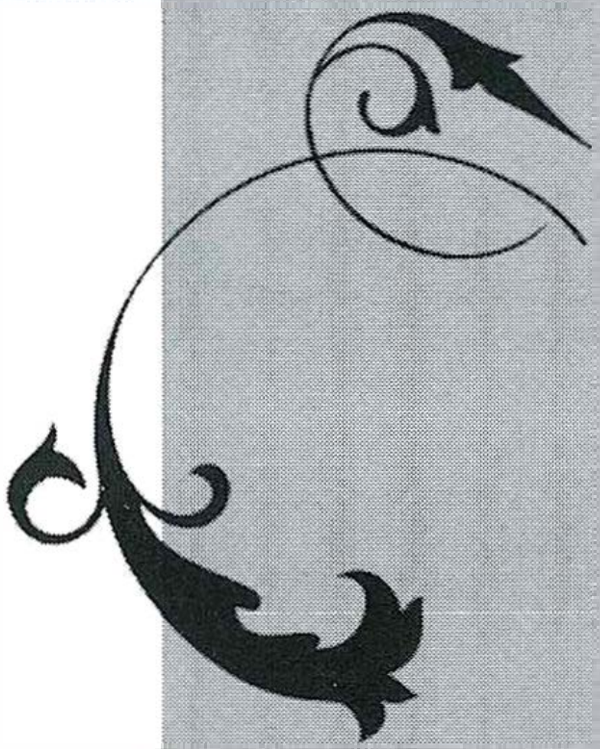


5. Lascia ch'io pianga
〈泣かせたまえや〉

Armida, dispietata colla forza d'abisso,
rapimmi al caro Ciel di miei contenti,
e qui con duolo eterno
viva mi tiene in tormento d'inferno.
Signor! Ah! per pietà lascia mi piangere.

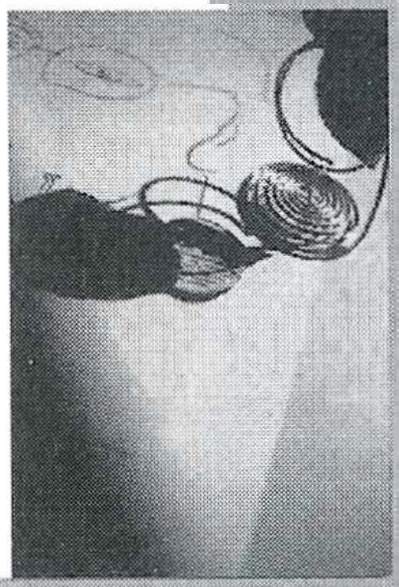
Lascia ch'io pianga la dura sorte
e che sospiri la libertà.
Il duol infranga queste ritorte
de' miei martiri sol per pietà.





6. If music be the food of love
〈もし音楽が愛の糧ならば〉

If music be the food of love,
Sing on till I am filled with joy.
For then my list'ning soul you move
To pleasures that can never cloy.
Your eyes, your mien, your tongue declare
That you are music ev'rywhere.
Pleasures invade both eye and ear,
So fierce the transports are, they wound,
And all my senses feasted are,
Though yet the treat is only sound.
Sure I must perish by your charms,
Unless you save me in your arms.



7. O lead me
〈私を導いてください〉

O lead me to some peaceful gloom,
Where none but sighing Lovers come,
Where the shrill trumpets never sound,
But one eternal hush goes round.
There let me soothe my pleasing pain
And never think of war again.
What glory can a lover have,
To conquer yet be still a slave?

8. Music for a while
〈音楽はしばしの間〉

Music for a while
Shall our cares beguile:
Wondering how your cares were eased,
And disdaining to be pleased
Till Alecto free the dead
From their eternal bands,
Till the snakes drop from her head,
And the whip from out her hands.

9. Since from my dear
〈アストレアとの別れ〉

Since from my dear Astrea's sight
I was so rudely torn,
My soul has never known delight,
Unless it were to mourn.
But oh, alas, with weeping eyes
And bleeding heart I lie,
Thinking on her whose absence 'tis
That makes me wish to die.

10. Thrice happy lovers
〈幸せの恋人たち〉

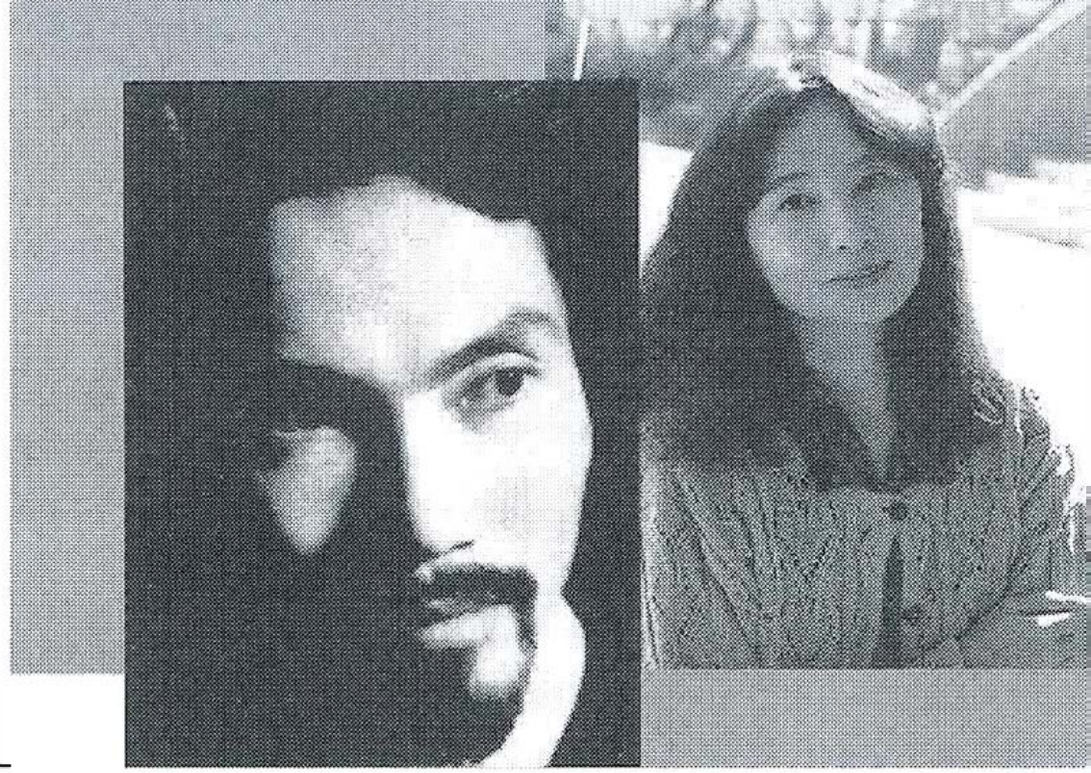
Thrice happy lovers,
May you be for ever, ever free
From the tormenting devil, jealousy,
From all the anxious cares and strife
That attends a married life.
Thrice happy lovers,
May you be for ever free.

Be to one another true,
Kind to her as she's to you.
And since the errors of the night are past,
May he be ever constant, she be ever chaste.

11. The fatal hour
〈最後の刻〉

The fatal hour comes on a pace
Which I had rather die than see
For when fate calls you from this place
You go to certain misery
The thought does stab me to the heart
And gives me pangs no word can speak
It wracks me in each vital part
Sure, sure when you go my heart will break
Since I for you so much endure
May I not hope you will believe
'Tis you alone these wounds can cure
Which are the fountains of my grief

岡田孝は幼少よりボーイソプラノの美しい声を注目され、9歳で日本コロムビアと専属契約を結び、数多くの童謡のレコーディングに活躍。変声期の後、浦山弘三氏に師事し、大阪音楽大学、専攻科、関西二期会研究生を経て、当初テノールとして演奏活動を開始したが、当時発足したばかりのダンスリールネサンス合奏団の歌手にと師より推挙を受けたことをきっかけとして、カウンターテナーに転向、師の助言と多くの文献や音源を駆使したひたむきな練習時間を過ごした。アルフレッド・デラーのレコードに大きな衝撃を受けたのもこの頃のことであり、その感嘆が後のデラーアカデミーでのデラーとの出会いへと繋がって行った。デラー指揮によるパーセル『ダイドとエネアス』のソリストにも抜擢され同年フランス各地のフェスティバルにも出演。また前後して収録されたカウンターテナーとして日本人初のソロアルバムは、専門誌でも高い評価を受けた。我が国ではNHK・FM「リサイタル」や「バロック音楽の楽しみ」でのオンエアをはじめ、東北から九州にいたる日本各地からの招聘を受け、外来アーティストとの共演も含め数多くの公演に出演。それらは識者より「希少価値以上の才能(為本章子)」「実に気持ちの良い演奏会、岡田孝が既に立派な自己の歌唱スタイルを確立していることは特筆に値する(三宅幸夫)」「岡田孝を聴けたことは、私にとって収穫(柴田仁)」と迎えられた。しかし岡田は寡作の演奏家であり、「聴いて戴けるレベルに達するのに時間がかかってしまうので…」と言う彼の音楽観から来るものか、演奏会の招きには受ける数より辞退する数が圧倒的に多かった。近年は特にこの傾向が強く見られたが、1991年突如、国際交流基金によりドイツへのコンサートツアーを行ない、シュパイヤー2000年記念音楽祭、アイゼナッハフェスティバル、チューリンゲン放送、ケル



ン、マンハイム、カールスルーヘ等ドイツ各地で18回の公演に出演。これらはラインプファルツ紙をはじめ、新聞各紙の評論での絶賛と聴衆の熱狂をもって迎えられた。そのレパートリーは、バッハ「マタイ受難曲」やバーンスタインの「チチェスター詩篇」「ミサブレビス」、ブリテン「真夏の夜の夢」などバロックから現代のオラトリオやオペラ、ダウランドのリュートエアー、ルイスミランのエルマエストロ、パーセルの劇音楽、イタリア古典の数々、シェイクスピア時代の作品と幅広い。その中からパーセルとイタリア古典の中から選んだプログラムで収録されたものがこのCDとなった。チェンバロを担当しているのは、学生時代からの同窓生でピアノを専攻していた夫人の岡田多美子である。岡田のこれまでの演奏会曲目の練習は、すべて夫人の伴奏によって支えられて来たので、「その日の演奏の出来については一番的を得た講評をしてくれる」と語る。近年は関西近隣での演奏会では共にステージに上がることが多く、94年夏にはヨーロッパへのコンサートツアーに同道することが決まっている。このCDで使用されたチェンバロは岡田多美子所蔵の17世紀フレミッシュモデル/シングルマニュアルと、テアトロラモーのフレンチタイプ/ダブルマニュアルの二種であり、さらに曲に応じてリュートストップや8'ダブルの使用など、音色の変化と工夫が行われている。調律はいずれもヤング調律法でピッチはa^1＝415、岡田夫妻と梅岡俊彦が担当した。録音はワンポイントマイク方式で、人工的な操作を加えず、コンサートホールの持つ豊かなホールトーン、演奏者との適度の距離感、といった自然な音場の再現が図られている。

ラインプファルツ紙　15. Juni 1991

日本のカウンター・テナー唱法の巨匠タカシ・オカダは、彼の豊かなダイナミックス、稲妻のようなコロラテューラのテクニック、上品で細やかな表現力、その上感情の込もった澱みのない歌唱を通して、聴衆にジェズアルドやモンテヴェルディ、さらにグルック、モーツァルト等の作曲家が、何故カウンター・テナーをかくも高く評価していたのか、を容易に納得せしめた。

Gerd Kowa　ゲルト・コヴァ

マイン・ポスト紙　28. Mai. 1991

幼年時より既に成功を納めているタカシ・オカダを、日本のカウンター・テナーの第一人者とみなすのは至当のことである。ヘンリーパーセルの歌曲に対する彼の解釈は、まさに最高の権威あるものと言わねばならない。

フレキシブルで変幻自在な彼の声は、多彩な表現を余す所なく引出し、原典に対する正確な理解は、言葉の上のみならず、音楽的な意味に於いても、激情を帯びた曲のインペントゥオーソを表現するのに相応しいものであった。『Strike the Viol』と『O, lead me』の両曲はともに圧巻であった。

MAIN POST

ZEITUNG FÜR UNTERFRANKEN

Main Post

Takashi Okada, schon als Kind in Japan überaus erfolgreich, darf mit Fug und Recht beanspruchen, zu den führenden japanischen Countertenören zu zählen. Seine Interpretationen von Liedern Henry Purcells konnten höchsten Ansprüchen genügen. Die flexible, modulationsfähige Stimme ermöglicht dem Sänger, eine breite Ausdruckspalette auszuschöpfen, und die gute Textverständlichkeit entsprach ganz dem Impetus dieser vom musikalischen ebenso wie vom sprachlichen Affekt getragenen Musik. Höhepunkte waren die beiden Lieder „Strike the Viol" und „O lead me".

DIE RHEINPFALZ

Unabhängige überparteiliche Zeitung

LUDWIGSHAFENER RUNDSCHAU

DIE RHEINPFALZ

Der japanische Großmeister des Falsettgesangs Takashi Okada ließ durch seine reichhaltige Dynamik, seine fulminante Koloratur-technik und die dezente Parzellierung affektiver Abläufe einmal wieder erahnen, warum Komponisten wie Gesualdo, Monteverdi, ja noch Gluck und Mozart diese Kehlenfarbe nicht nur aus Not und wegen des zeitweiligen Bühnenverbots für Frauen so hoch einschätzten.

GERD KOWA

Die brillante Technik des Sängers aus dem Lande der aufgehenden Sonne ging einher mit einer authentischen, effektreichen Interpretation der Barockliederdichtung. Dynamische Delikatesse weitete auch beim nächsten Lied, „Strike the viol", in dem Geige, Harfe und Laute zitiert werden. Das virtuose homogene Zusammenspiel der zierlichen Söhne Nippons begeisterte die Zuhörer in der gut besuchten Gotischen Kapelle.

BARBARA HINZEN

BADISCHE NEUESTE NACHRICHTEN

P 1465 A

inzwischen als führender Vertreter seines Fachs in Japan gilt, bereitete seinem Publikum mit sechs Liedern von Henry Purcell ein besonderes Vergnügen.

Trotz der trockenen Akustik des Konzertraums in der Christophoruskirche entfaltete der Countertenor sein Können, das sichere Intonation und saubere Aussprache voraussetzt. Ausdrucksvoll, aber niemals nach außen drängend, sondern sehr verinnerlicht, projizierte er Stimmungen und Bilder in den Raum, immer wechselnde Klangfarben hervorzaubernd.

Für den reichlichen Beifall bedankten sich die beiden Musiker mit einem ergreifenden „Ave Maria" und einem japanischen Wiegenlied.

Benedikt Stegemann

ラインプファルツ紙　11. Juni 1991

日の出ずる国（日本）から来たこの歌い手の絢爛たる技巧が、バロック歌曲に対する正当かつ効果的な解釈と一体となって輝いて見えた。

続いてヴァイオリン・ハープ・リュートを歌いこんだ曲"Strike the Viol"では、ダイナミックで精致な名唱が、この曲をも意のままにした。

彼は、非凡な大きな拍手喝采を受け、この室内楽演奏会を6つの歌曲でしめくくった。ヴィルトゥオーソぶりでも均質の、二人の優雅な日本人演奏家の共演は、満席のゴティシェ・カペレの聴衆の魂を熱狂させた。

Barbara Hinzen　バーバラ・ヒンツェン

ノイエステ ナッハリヒテン紙　8. Juni 1991

日本におけるその専門分野の代表者と認められる彼は、H.パーセルの6曲のアリアによって、聴衆に例をみない満足感を与えた。クリストフォルス・キルヒェの乾いた音響効果にも拘らず、このカウンター・テナーの歌い手は、正確なイントネーションと清潔な発音に裏打ちされて、彼の可能性を遺憾なく発揮した。豊かな表現力は、決して外へ向かって激しく迫るのではなく、きわめて内面的に、移ろいゆく音色という魔法を駆使しながら、彼は自己の情趣とイメージを音楽空間に投影するのである。惜しげもなく捧げられた大きな拍手喝采に応え、感動的なアンコールを演奏した。

Benedikt Stegeman　ベネディクト シュテーゲマン

“これが天職です”

日下部 吉彦（音楽評論家）

岡田孝を、童謡のアイドル歌手として覚えている人は、もうほとんどいないだろう。戦後間もない昭和20年代の後半、第1次の童謡ブームがあった。安田祥子、安田章子（いまの由紀さおり）の姉妹をはじめ、松島トモ子、安西愛子、松田トシといった童謡歌手たちが、圧倒的な人気を集め、ラジオやSPレコードでのスターだった。（テレビはまだなかった）戦後のすさんだ世のなかに、暖かいやすらぎを与えてくれたのが、彼らだったが、このなかに岡田孝がいた。最近、SPから復刻されたCD「懐しの童謡歌手たち」のなかに、前述の歌手たちに混じって、岡田孝の可愛い声を聴くことが出来る。

ボーイ・ソプラノとしてスタートした岡田は、長ずるに及んで、立派なテノール歌手となり、関西二期会などのオペラの舞台にも立った。

そして1973年、第3の変身を遂げる。

カウンター・テノール。当時としてはまだ、ほとんどなじみのない呼び名であった。男声でありながら、特殊な発声法により、女声の音域を歌う。肉体そのものの手術によって“女声歌手”となる“カストラート”とは基本的に異る分野だが、ヨーロッパではルネッサンス期以来、とくに古楽の演奏には不可欠の歌手として知られる。

その領域を専門とする歌手は、日本では皆無といわれた時代に、彼は敢えてそのジャンルに挑戦した。この道の権威、アルフレッド・デラーに師事するため、何度も渡欧し、“まるでカウンター・テノールのために生まれてきたような声帯”との折紙をつけられた。

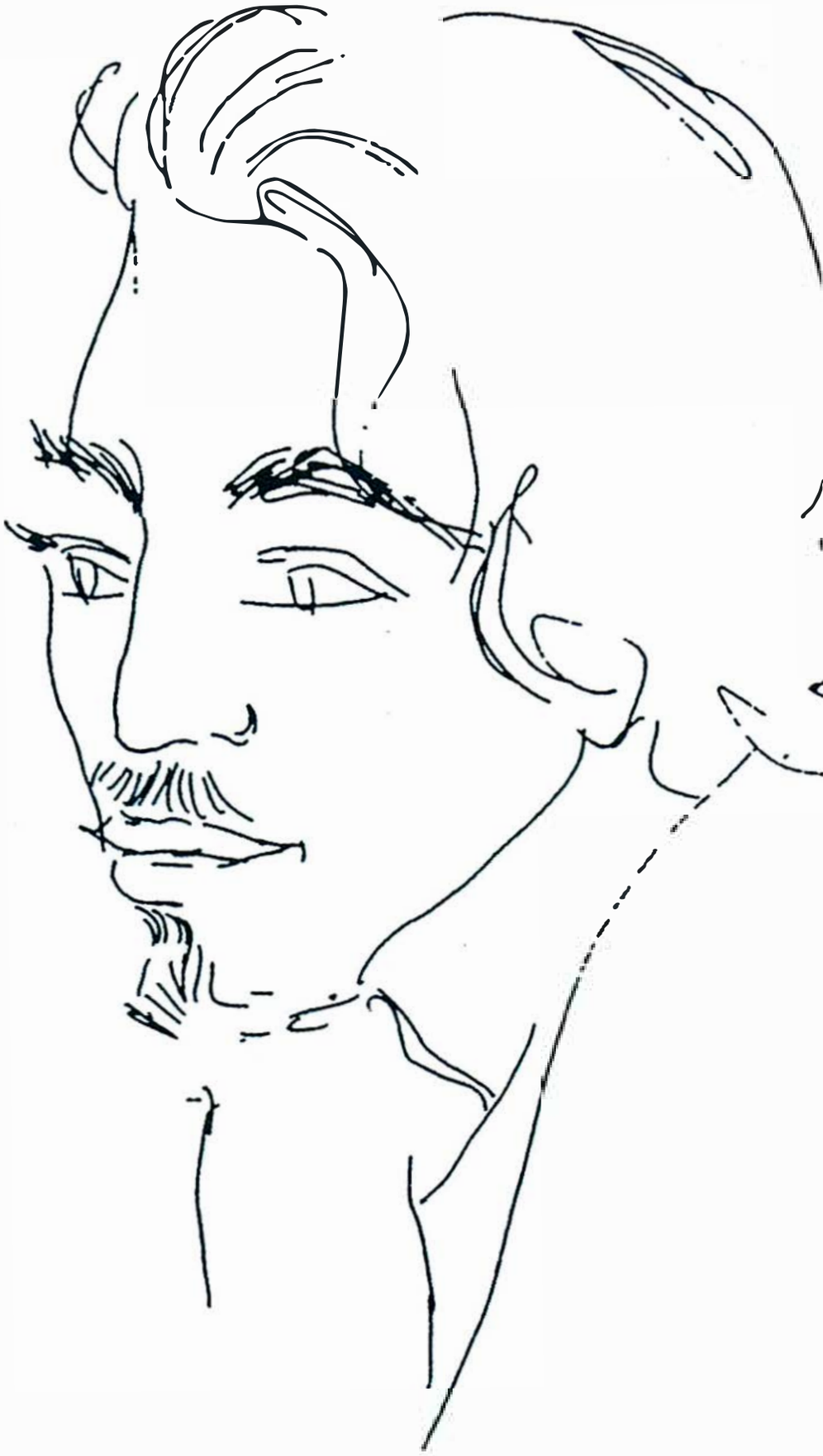
78年、日本人として初のカウンター・テノールのソロ・アルバム（LP）をリリースした。ジョン・ダウランドなど、イギリス・ルネッサンス声楽曲を中心に選曲され、その透明で澄みきった声の美しさが大評判となった。

それから16年、さらに研鑽を積んだ岡田 孝が、満を持して第2弾（CD）を出す。若々しく、美声が売りものだった岡田も、16年間の演奏経験や人生体験が、音楽を一層成熟させた。楽曲に対するアナリーゼや掘り下げも、以前とは比較にならない。とりわけ、91年のヨーロッパ演奏旅行の成功と、現地での批評に、大いに力づけられたことは明らかだ。

今回のCDで、とくに感じることは、ドラマティックな強さだ。これは以前にはなかったもの。また、バロック声楽曲の装飾音の扱いも巧みで適切。高音域での強さの半面、低音域でのまろやかさが加わったことも印象的だ。

この道に入ったことを、彼は“天職を得た”という。わが人生を、このように言い切れる声楽家が果して何人いるだろうか。幸せな人である。幸せといえば、人生の好伴侶多美子夫人をチェンバリストに起用、息のあったデュオぶりを披露しているのも二人の人柄の暖かさを、私たちに味あわせてくれて楽しい。

A boy soprano from childhood Takashi Okada singed an exclusive contract with Columbia Records when he was nine years old and made many subsequent recordings. After his voice matured he entered the Osaka College of Music graduating from the Special Music Course where he studied with Professor Kozo Urayama. He first sang as a tenor under the direction of Alfred Deller among other famous teachers and eventually became a countertenor. He has of course appeared all over Japan as well as in Germany and France where his musical performances have been widely acclaimed. His exceptional technique and musical interpretation have gained him great fame and an avid worldwide following.



録音データ

収　録/1993.11.29/1994.1.7
会　場/青山音楽記念館バロックザール
録　音/バッテリー駆動ワンポイントマイク
　　パイオニア96Khzサンプリング DAT
調　律/梅岡俊彦 a1=415(ヤング)
録音ディレクター/西垣正信
執　筆/皆川達夫　日下部吉彦　那須輝彦

TAKASHI OKADA (counter tenor)
TAMIKO OKADA (cembalo)

Amarilli, mia bella

アマリリ麗し

〈曲目〉	〈作曲〉	〈使用楽器〉
1. Sento nel core (3:30) 〈わが胸を〉	Alessandro Scarlatti	1
2. Amarilli, mia bella (2:57) 〈アマリリ麗し〉	Giulio Caccini	1 (リュート)
3. Star vicino (2:13) 〈君がみそばに〉	Salvatore Rosa	2
4. Tu ch'hai le penne (3:14) 〈翼持つ君〉	Giulio Caccini	2 (リュート)
5. Lascia ch'io pianga (3:47) 〈泣かせたまえや〉	George Frideric Handel	1 (ダブル8)
6. If music be the food of love (2:35) 〈もし音楽が愛の糧ならば〉	Henry Purcell	1
7. O lead me (2:34) 〈私を導いてください〉	Henry Purcell	2
8. Music for a while (3:20) 〈音楽はしばしの間〉	Henry Purcell	2
9. Since from my dear (3:11) 〈デストレアとの別れ〉	Henry Purcell	1
10. Thrice happy lovers (2:26) 〈幸せの恋人たち〉	Henry Purcell	1
11. The fatal hour (2:57) 〈最後の刻〉	Henry Purcell	1

Amarilli, mia bella ● Counter Tenor/TAKASHI OKADA・Cembalo/TAMIKO OKADA

FMC-5070

〈アマリリ麗し〉イタリア古典とパーセルの調音楽

岡田孝(CT)・岡田多美子(Cembalo)

FMC-5070

COMPACT disc DIGITAL AUDIO

DISTRIBUTED & PRESENTED BY FAUEM MUSIC CORP. P&C 2007 STEREO Manufactured by Sony Music Entertainment (Japan) Inc.

税抜価格 ¥2,300
税込価格 ¥2,415

このCDは一定期間貸与非許諾商品ですが、この期間経過後も権利者の許諾なく賃貸業に使用することを禁じます。また、個人的に楽しむなどの場合を除き、著作権法上、無断複製は禁じられています。

ファウエム ミュージック コーポレーション